

マルコ8章13-21節 「霊的盲目の危機」

1A 見えていない目

1B 共におられるイエス

2B 関わっている弟子

3B 自分の負い目

4B 目を離している弟子たち

2A 二つのパン種

1B 律法主義

2B 世の愛

3A はっきり見える目

1B 御霊の啓示

2B 見えなくとも見る信仰

本文

マルコによる福音書 8 章を開いてください。私たちの聖書の学びはマルコ 7 章まで来ましたが、今日の午後に 8 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、13-21 節に注目します。「13 イエスは彼らから離れ、再び舟に乗って向こう岸へ行かれた。14 弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、一つのパンのほかは、舟の中に持ち合わせがなかった。15 そのとき、イエスは彼らに命じられた。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。」16 すると弟子たちは、自分たちがパンを持っていないことについて、互いに議論し始めた。17 イエスはそれに気がついて言われた。「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。18 目があっても見ないのですか。耳があっても聞かないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。19 わたしが五千人のために五つのパンを裂いたとき、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」20 「四千人のために七つのパンを裂いたときは、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」」

イエス様は、以前、男だけで五千人に対し、パンと魚を与える奇跡を行われました。パンが五つしかなかったのに、満腹して、しかもあまったパンが 12 籠にもなりました。そしてイエス様は今度は、四千人の男たちにパンと魚を与える奇跡を行われました。この時もパンが有り余って、七つの籠にそれを入れています。それなのに、弟子たちはイエス様がパン種の話をした時に、自分たちがパンを持って来るのを忘れたと勘違いして、それで議論していたのです。十二人であれば、2-3 個のパンで、十分に満ち足りることができるのに、今さっき、四千人への給食の奇跡を見たのに、そしてその前に、五千人への給食を見たのに、慌てふためいていました。それで、イエス様は、

「あなたがたは目があるのに見えないのですか？耳があっても、聞かないのですか？」と言われて、彼らの心が鈍く、悟るのに遅いことを指摘しておられます。

1A 見えていない目

宣教会議にて、あるスピーカーが、エリシャの奇跡について説教しました。アラムの王が、エリシャの家に軍隊を送り、そこを取り囲んだ時のことです。それで、エリシャの僕が、「ああ、取り囲まれている！」と、もう終わりだと嘆きました。けれども、こうあります。「Ⅱ列王 6:17 そして、エリシャは祈って【主】に願った。「どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」【主】がその若者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」見えるはずのものが見えていないので、エリシャが見えるように祈ったら、実は、アラム軍を、主による馬と戦車が取り囲んでいたのです。

興味深かったのは、ブライアン・ブローダソン牧師の奥さん、シェリルさんがイギリスで教会開拓をしていた時のことです。女性のための伝道集会を開いていたそうです。ちょうど、私たちがバイブル・カフェといいますが、クリスマスのバイブル・カフェのように人々を招いたのです。そうすると 21 人が来たそうです！すごいですね、そのことを E メールで宣教報告としてアメリカの教会の人たちに書きました。すると、喜びを共にするのではなく、「これから成長するからね。」というような、その 21 人がとても少ない人数で、実が結ばれていないかのような反応だったのです。自分たちは主のなされていることに喜んでいのに、カルバリーチャペルがアメリカで伝道集会をすると、何百人になるので、そういった反応なのです。これは、物理的な数を見て、霊的な神の働きが見えていないということです。

1B 共におられるイエス

私たちは常に、「イエス様が共におられるのに、いないかのように錯覚している」「イエス様がおられるのに、見えていない」という問題があります。イエス様は、弟子たちと、いつも共におられました。そして、ある時にこう言われました。「マタ 13:16 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。」私たちは、弟子たちについて、すぐそばにイエス様がおられたから、さぞかし私たちよりもイエス様のことを理解していると思うと思います。事実、すぐそばでイエス様を見る、またイエス様の生の声を聞く恵みにあずかっていました。旧約時代の預言者たちが、どれほど願っても、そこまではっきりと神の声を聞いたことがありません、実に、顔と顔を合わせて主と語らっていたモーセでさえ、弟子たちほどには、主を見ていなかったのです。けれども、ここで読んだように、彼らの心が鈍く、悟っていない部分があったのです。そしてイエス様は、「マタ 28:20・見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」と言われたのですから、聖霊によって私たちと、今も共におられるのです。

2B 関わっている弟子

イエス様は、共におられるだけではありません。ご自分の働きに、弟子たちを関わらせませす。五

千人の給食の時も、四千人の給食の時も、弟子たちにご自身が増やされたパンを配らせました。「8:6 すると、イエスは群衆に地面に座るように命じられた。それから七つのパンを取り、感謝の祈りをささげてからそれを裂き、配るようにと弟子たちにお与えになった。弟子たちはそれを群衆に配った。」弟子たちは、パンや魚を増やすという奇跡は行なっていませんが、人々に配ることによって、その奇跡に関わっています。私たちも同じように、主の働きに関わっていますから、だから、人々が福音によって変わっていくのを、目の当たりにするのです。

3B 自分の負い目

すべてのことは主が行われます。私たちは、神の恵みによって、そのすばらしい働きに関わらせていただくことができます。けれども、弟子たちのように自分自身のことに目が行ってしまい、そのすばらしい恵みを見失ってしまうことがあります。イエス様が、パリサイ人とヘロデのパン種に気をつけなさいと言われた時に、16 節、「すると弟子たちは、自分たちがパンを持っていないことについて、互いに議論し始めた。」とありますね。当時、ユダヤ教の教師、ラビは弟子たちに日常の作業の分担をさせていました。旅に必要な糧食を準備するのも、弟子たちでした。ところが、彼らが舟に乗った時はパンを一つしか持っていなかったのに、イエス様が、「パン種」と言われた時に、てっきり自分たちがパンを持ってくるのを忘れたことを、指摘されたのだと思い込んで、それで議論していたのです。

4B 目を離している弟子たち

しかし、すべてのことをなされているのは神です。「ロマ 9:16 ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」とパウロは言いました。神が行われている事なので、私たちの務めは信じることなのです。そして主から言われたことを、ただ聞き従うことのみです。ところが、自分に意識を持っていき、負い目にしても、何かを達成したにしても、あたかも自分がしているかのように、自分が支えているかのように思いを寄せていく時に、主から目を離してしまっています。それで、イエス様と弟子たちの間に、ちぐはぐな誤解が生じて、意思疎通がきちんと出来ていないのです。

宣教会議の時に、毎朝、祈り会があります。私は時差ボケで午前3時とか4時に起きてしまっていましたから、6時から7時半までの祈り会には、ぼっち目覚まして参加することができます。そして、これがとても充実しているのです！まさに主の神殿の中に入っているような気分で、主のご臨在の中にみなが入っていくような思いです。初めに、みことばの奨励があり、それから自由に、誰かが声を上げて祈り、一時間ぐらいたら、2-3人に分かれて祈ります。最後の日、この祈り会を導いている、祈りと宣教のために骨折っている牧者、フィル・トウエンティさんが私に声をかけてくれました。小グループになって祈るとき、二人だけで祈ってくれたのです。彼は、心を割って、自分の弱さもさらけ出して祈っていました。その内容は、たった一瞬でも、聖霊により頼まずにいたら、自分がどんなにか肉体的であるのか、という祈りでした。日毎に、ではなく、まさに一瞬、一瞬、主に抛り頼んで、心の中で主を呼び求めて、聖霊に満たしていただき、そして主の力によって生きるの

です。弟子たちが、こんなにもイエス様ご自身とその御業に囲まれていたのに、心が正しいところになかったのですから、なおさら、私たちは聖霊に満たされる必要があるでしょう。

2A 二つのパン種

ところで、この話で分かることは、「弟子たちでさえ、パリサイ人やヘロデの教えていることが浸透して、イエス様が見えなくさせられ、心が鈍くなっている」という現実です。パン種というのは、ここでは喩えです。マタイの福音書では、それは偽りの教えであり、ルカによる福音書では、パリサイ人のパン種というのは、偽善であるとあります。パン種は、パンを焼く時にパンを膨らませるのに必要な、イースト菌のことです。発酵種あるいはスターターとも呼ばれますが、パン種の入ったパンの塊を、粉に入れれば、その発酵は全体に広がります。そして、次のパンのために一部を引きちぎって、それをスターターに使います。発酵種があって、いつまでも使えるわけです。

これが、悪い影響力として聖書では喩えとして使われます。コリント第一では、不正や罪が教会にある時にそれをパン種として表現しています。だれかが不品行の行いをしていたら、それが全体に霊的な雰囲気広がっています。苦みを誰かが思っていたら、全体に広がります。悪口も、教会を殺します。それはパン種のようなもので、自分だけの汚れで押さえておくことはできないのです。

そしてイエス様は、ここでは「偽りの教え」を指していると思われます。結局、彼らの教えに従えば、パリサイ人の場合は、イエス様のなされていることを悪魔によるものだとして中傷したり、またイエスを殺したいと思う程にまでなります。ヘロデの場合も、イエスを受け入れず、ルカの福音書によればイエスを殺そうとまで思っていたのです。それで、イエス様はしばらくの間、ガリラヤ地方を避けて、その周りの異邦人の地域を回っておられたのです。

1B 律法主義

パリサイ人の教えとは、律法主義と言ってよいでしょう。神の律法は私たちに自由をもたらします。けれども、主に拠り頼まずに、御霊によるのではなく、代替の枠組みを与えて、それで満足できるようにさせます。規則や決まりを守ってさえいれば、自分は霊的である、救われていると思わせるのです。この前、手を洗う儀式でそれを弟子が行っていなかったことでパリサイ人が責めたことを思い出してください。これらの戒めを守っていることが大事で、神の命令に聞き従うことを怠っていたのです。もし私たちが、御霊による喜び、神の働きのすばらしさに感動していなければ、霊的に危険な状態です。いつものように日々を過ごし、日曜日には礼拝に参加し、自分の生活を崩さずに、現状維持を続けようとしています。そこに、主が介入して、何か驚くべきことが起こることを期待しません。そうすれば、礼拝でさえが、パリサイ人のように、形だけのものになり、口では神を敬つても、心が離れていることになってしまうのです。

そしてパリサイ人は、人々と自分を分離させようとしています。自分は神に聖なる者だから、汚れたも

のに触れてはいけないとしていました。けれども、イエス様は、罪人や取税人と食事をしておられました。それに対してパリサイ人は怒りました。しかし、主は罪人たちの間で働いておられないのでしょうか？いいえ、主の御霊は、暗闇の中でうごめいておられました。創世記 1 章 2 節に、暗闇の中に御霊が動いておられて、それで光よあれ、と主が言われて、光がありました。主は、まだ神を知らない人たちの間にも働いておられて、そしてご自分の栄光を表そうとされているのです。サマリヤの女を思い出してください、彼女は遠く神から離れているように見えました、けれども、実はメシアを求めている人であり、イエス様に出会って救われたのです。私たちも、未信者の人たちの中にも神が働いておられ、私たちがそこにある神を見ること、神の声を聞くことができるようにしていないといけません。語るだけではないのです、聞いて、そして語る。双方向なのです。

カルバリーチャペルの初期、ジーザス・ムーブメント、すなわちイエス革命というリバイバルが起こりました。平和や愛を求めて、家から離れて、半ばホームレスのようになって、共同生活をしていた若者が出てきました。けれども、フリーセックスや麻薬などで結局は、自分たちを滅ぼすようなことをしてきました。けれども、彼らが歩いている海岸で、チャックの奥さんのケイさんが、涙を流して祈り、彼も祈るようになって、そして一部のヒッピーが来るようになったら芋ずる式にやってきたのです。イエス様にあって愛、平和を見つけて、ジーザス・フリーク、イエス気違いと呼ばれるようになりました。けれども、カルバリーチャペルにある事件が起こりました。彼らは裸足で礼拝堂に入ってくるのですが、裸足にはわずかに石油系の物質がついている砂がついていました。海岸を歩いているからです。それが絨毯に着くと、もう取れません。それで、朝にチャックが教会に来ると、「はだしのままでは出入り禁止」という立て看板がありました。まだ、他に誰も来ていない早い時間だったので、それを撤去できたのですが、後に教会の役員会で、「もし絨毯が問題なのであれば、絨毯をひっぺ返して、コンクリートの床にします。」と言いました。危機を克服できました。

このように、知らずうちに、熟練した信者でさえ、パリサイ人のパン種が入っていて、イエス様のなされていることが見えなくなってしまうのです。

2B 世の愛

では、ヘロデのパン種とは何でしょうか？ヘロデは、ユダヤ教の改宗者でした。けれども、彼の生活は異教的でした。ローマに支えられている彼の統治は、彼の生活もローマ式でありました。この前、ヘロディアの娘サロメが、ヘロデたちの前で官能的な踊りをさせたことを思い出してください。ユダヤ教を信じる者たちが、そうしたものは避けなければいけないのですが、ローマの慣習も律法を犠牲にしても踏襲していました。彼は俗者であり、バプテスマのヨハネの話を非常に興味を持って聞いていたのに、自分の悪業が戒められると、結局、相手を迫害するのです。

ヘロデのパン種とは、つまり、世を愛することです。使徒ヨハネが言いました、「Iヨハ 2:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」自分の肉が欲するもの、また目に見えるもの、そして暮らし向きの

自慢とありますが、これは、プライドといってよいでしょう、そういったものは神からではなく、世から出たものです。パリサイ人のパン種と同じように、ヘロデのパン種も、わずかなものが全体に広がります。その始まりは僅かなのですが、次第に全体に広がってしまうのです。イエス様を敬っていると言いながら、世の価値観と混ぜ合わせているので、イエス様の姿が見えなくなってしまいます。

コリントにある教会は、まさにこの過ちに陥っていました。パウロが自分たちを支配して、縛っていると思っていたが、実はその反対でした。心を広げているのはパウロで、閉ざしているのは自分たちだったのです。「Ⅱコリ 6:12-13 あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいけません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。」中学生ぐらいの子が、お父さんにとにかく言われて、傷ついたとかいう時に、大人になってから実はこんなに自分のことを思っていてくれたのだと気づいた、という話がありますが、そのような感じですが。コリントの人たちが、霊的にまだ幼かったのですが、それは相容れないはずのこの世の価値観を、信仰の中に混ぜていたからです。パウロは続けて、言いました。「6:14-15 不信者と、つり合わないくびきをともしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。」

もし私たちが、この世の生活のほうで、主との関係よりも面白くなってきたら、そちらに心が奪われるようになってくると、主のことが、教会のことが窮屈になってきます。けれどもそれは、教会が窮屈にしているのではなく、自分自身が窮屈にさせてしまっているのです。神にどれほど愛されているのか、また兄弟姉妹からどれほど愛されているかが見えなくなってしまうからです。ですから、心の中での世からの決別、聖別が必要です。

3A はっきり見える目

弟子たちは、イエス様にこのように諭されましたが、その後で興味深い話が出てきます。ベツサイダで盲目の人を癒されるのですが、二段階で癒されています。初めは、全く見えないところから、ぼやけて見えるようになりました。そしてイエス様が二度目に手を目に当てたら、はっきりと見えるようになりました。それは、まさに弟子たちの霊的な姿でした。イエス様と共にいるので、何となく、イエス様が誰であるかは知っていたのですが、ぼやけていたのです。それは、まだ心を鈍らせるようなものがあって、それが取り除かれなければいけなかったのです。

そしてベツサイダから、ピリポ・カイサリアに旅をして、そこではっきりと、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と尋ねられました。ペテロは、「キリストです」とはっきりと答えています(29節)。これまでのイエス様の奇跡や教えを見れば、この方はキリストに間違いないと、ペテロは示されたのです。自分はと言うのか？と尋ねられた時に、自分自身でしっかりと、イエス様の言われたこと、イエス様の行われたことを思い巡らさないといけません。その時に、漫然と人々が言っていることについて行っているだけでは、分かりません。今、自分が聞いている御言葉は、はた

して自分の日常生活では、どのように適用できるのか？ということについては、しっかりと御言葉を思い巡らし、自分で考え、それで聖霊によって示され続けなければいけません。

1B 御霊の啓示

私たちは、イエス様をはっきりと見て行くという務めの中に生きています。そのことによって、イエス様の願われていることの中に生きることができます。怠惰になることもないし、また、目的が分からない、空を打つような拳闘になるようなこともありません。確かに、御心の中に生きて、神を喜ばせていると確信して生きることができます。主を見て行くという営みを地上で続け、これが、主が戻られる時まで続き、主にお会いする時は、顔と顔を合わせるように、はっきりとこの方にまみえます。「I コリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることとなります。」

私たちは、主にお会いする時までの間、御霊によって、心の目が開かれて行く必要があります。「エペ 1:17-18 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、」御霊の助けを祈ってください。「主よ、聖霊を注いでくださって、私が見るべきものを見ることができますように。」と祈ってください。

2B 見えなくとも見る信仰

そして、私たちには、目に見えないものを見るようにして見る、信仰が必要です。それは、希望的観測ではありません。自分の願っていることを思い込んで、想像することではありません。神の約束が確かであり、そのように肉眼では見えなくとも、それが事実なのだと信じていることです。雨天の日であっても、雲の上は快晴であることは誰もが知っていますね。飛行機に乗れば、一目瞭然です。雨だからといって、太陽は出ていないとか言ったら、笑い者にされてしまいます。同じように、神がおられるのに、ただそのように見えただけでいないと言ったら、愚かです。「ヘブ 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」